

ている点も重要であろう。

最後に、本書第2章で著者が進められつつある「雇用問題の諸相」の〈現状診断〉も、このような〈完全雇用〉基準に即して著者ご自身によって“総括診断”してみたいことを希望したい。 【小林 謙一】

長幸男・住谷一彦編

『近代日本経済思想史』I・II

有斐閣 1969~71 2冊

(近代日本思想史大系)

上下2巻、A5版で1000ページのこの大著は、明治一大正一戦前昭和、そして戦後の現代にいたる近代日本の発展の過程を、主として経済思想の側面から追跡した労作である。そこに配列されている個々の論文には、それぞれに行きとどいた調査や綿密な考証がともなわれていて、その結果新しい事実群や材料が発掘され、そしてその意味が問われたり説明されたりするなど、総じて立派な諸研究が仕上げられている。この種の研究が待望されていたこの分野での最初の総合的作業として、本書の刊行の意義は高く評価されてよい。

同時にまたわれわれの先輩や先学が過去百年間の歴史の踏み出しや曲り角においていかに苦闘を重ねて思索し、または実践しているか、そしてその結果、今日から考えていかに多くの美事な先駆的作業が達成されてきているか、といった数々の重要な歴史的事実も明るみに出されていて、この面からも本書は十分に注目に値する成果を提供しているといわなければならない。

全体として26人の執筆者の手になる30篇の論文をみると、どれもみな得意の専攻テーマが追求されており、読者はその関心にしたがってさまざまな啓蒙と教訓をそこから読みとることができるであろう。評者が一読者として関心をよせた諸テーマをあげてみると、——明治初期の殖産興業政策、大隅財政と松方財政の異同、田口卯吉の通貨論、前田正名の思想と活動、自由主義と歴史学派の導入の模様、横井時敬をはじめとする「農政学」の意味、「東京経済雑誌」の詳細とその役割、植民地論をめぐる幸徳・矢内原・石原の立論、団琢磨の経営戦略と財閥の意思決定、農林官僚と石黒農政、全解禁論争小史、近代経済学の導入史、日本近代精神にふくまれている1つの緊張——内村的なものと徳富的なもの、北一輝と権藤成卿をめぐる日本型ファシズムの経済思想、「産業報国会」の背景的基礎と戦後企業別総合とタテの関連、新

興財閥のもつ意味、傾斜生産方式と経済安定本部の思想、等に——興味つきぬ研究が両巻にわたって展開されている。

このように個人の論文は、濃淡の差はあれ、いずれも、労作または力作といってよいが、これらをあつめて全体として一書の形でみてみると、改めてその内容がかなり不揃いであることに気づかざるをえない。いかに編集意図がはっきりしていても、参加者の数の多い総合企画の場合にはどうしてもこの種の難をまぬがれがたいし、そうでない場合でも執筆者たちの個性が強くあらわれるときは、往々にしてこのような結果となる。本書をとくに弁護するわけではないけれど、新しい事実や材料の発掘をもめざしているこの種の開拓的研究の場合には、全体としての書物の統一は多少犠牲とされることがあっても、各論者の筆のおもむくままにかなり自由な作業の展開を期待するほうがかえって望ましいという意見も成り立つであろう。だがそうはいっても、やはり単純な論文集ではないのだから、以下に若干の気づきや注文を述べておくことにしよう。——

この大著にたいしてはこれまでもすでに10篇をこえる書評がよせられているようである。このうちの2,3のものをべっ見したかぎりでも、本書にたいする注文はほぼ出そろっているようにも思われる。なかでも編者と1部の執筆者とをまじえた座談会「近代日本の経済思想をどう把えるか」(有斐閣「書斎の窓」202号)には、たいへん適切な指摘とコメントが示されている。その1,2をあげてみると、「この本は要するに経済思想による日本近代史であって、近代日本における経済思想の歴史ではない。その点に大きい不満が出てまいります。つまり経済思想の批判と継承の関係というか、あるいは経済思想の系譜という視角が、この本から脱落してしまっているということに、大きい不満を感じます。」(吉田静一)同じ社会科学の1つであっても、経済学という学問には、政治学や社会学とは異なって、単純に“時論”やプラクティカルな問題のレベルだけに解消できないような思考と概念の自立的世界がある。そのような世界の展開をめぐる思想の批判と継承を問題にするなら、吉田氏と同じ不満がきっと出てくるにちがいない。この点で次の発言も、全体の構成からみた本書の卒直な読後感の1つであろう。

「長さんもおっしゃったわけですが、確かに読んでみると、杉原さんの仕事とかそれから真実さんのお仕事(杉原四郎「自由主義と歴史学派」「古典派経済学と『東京経済雑誌』」、真実一男「近代経済学の導入史」)——これはヨーロッパが本来の専門の方たちですが、単独論文と

してみればすぐれたものだし、いろいろな事実を教えてください。非常に有益だったのですが、しかし全体の中では、何かそこだけ異質な、租界みたいな感じがするわけです。」(吉沢芳樹)

この発言に続いて吉田氏は、さらに本書について、ここには比較経済史的な観点はあっても、比較思想史的な観点が脱落していて、もし後者の観点が正面に出てくると、たとえば輸入経済学がいかに消化されてくるかという問題も、もう少し出てきはしなかったらどうか、とまことに適切なコメントを行なっておられる。評者も吉田氏のこの見解に同意したい。

次に本書を一貫する理論的基調としては、主として山田教授の『分析』や大塚教授の『序説』が明示的または暗黙にとりいれられている。このうちのたとえば山田理論の「型」にたいして、「その型というのが、西欧の現代経済学をやっている者にはよくわからないのです。山田盛太郎さんの『分析』を読んでも、型というのは、一体どういう経済理論的な意味をもっているのか。……静態的分析でも『資本論』の二巻三編をこえた問題——たとえば信用の問題からの検出もあったはず。たとえば明治期における日本銀行、横浜正金という国内、海外金融二分法が日本資本主義の根幹にどのような影響を与えたのか、という問題、……一般的に言えば、二巻三編をこえる三巻段階の適用がない。」(伊東光晴)

このような理論的不満にたいして本書はどう答えるだろうか。最後にこの座談会のなかで、本書の内在的批判の1つとして見逃せない発言と思われたのは次のものである。

「明治、大正、戦前、戦後を通じて“個”の問題のとりあげ方は、日本の思想史の中では非常に薄いと思うのです。……スチーブンの『18世紀イギリス思想史』も『功利主義論』でも、いつも「人間」が中心になっている。いわゆるキー・パーソンですね。きめ手の人間を何人か出してきて、それを中心にずっと叙述していく。そういうことをもう一度日本の思想史全体にわたってレビューするならまだまだ残されている点が沢山あるのではないかと思います。」(大河内一男)

以上はそれぞれ貴重なコメントや印象であるが、ここでなにより重要なことは、歴史というものはつねに現代

から過去にむかって語りかけられるものでなければならないという問題意識である。この問題意識を正面に据えて、もっと現代の視点から国際比較のアプローチで本書が編集されてほしかったというのが、評者の強調したい注文である。しかしそうすると、学派や派閥にとらわれる傾向のある日本のアプローチではもはや役に立たなくなる。タコツボ的閉鎖性は現代には通用しない。ところが本書のなかには、「明治維新史もしくは日本資本主義成立史を構造的に多角的視点から取り扱うその理論水準において、またその学術的精神的気迫において講座派の人々が労農派の人々のそれをはるかに高く越え、出発点においてすでに広い展望の上に立っていたことはすでに人の認めるところであり、否定しがたいところであろう」(Ⅱ巻470ページ)といったコンプレックス的表現の箇所が遺憾ながら散見される。こう述べたからといって、評者が労農派に属する者だなどと誤解されては迷惑である。

いうまでもなく学説史や思想史を叙述したり、さらに歴史の担い手たちの行動を観察したりするときに大切な要件は、問題の対象をなす理論や思想や行動についてその長所をなるべく引き出して、それを正當に評価することにあるといってよい。もしも本書が講座派に近い立場から書かれたものであるとするなら、今度はひとつ労農派の立場から、本書における同じ事実と材料をもとに「近代日本経済思想史」が書かれてみるとおもしろいであろう。いや評者自身は、マル経における講座派、労農派はもとより、近経派、さらには正統派と、諸派入り乱れて、それぞれの守備範囲で各自のメリットを十分に生かせるような形で編集された書物が生まれることは、むしろ特別の関心をよせている。なぜなら、西欧経済学200年の歴史の曲り角を迎えたと思われる今日において、おそらくこのようなものでなければ、未来への思想の展開を予想することも困難だろうと思われるからである。また近代日本経済思想史の上に特筆すべき足跡をのこしたカール・ラートゲンやエミール・レーデラー等々の外人教師の果たした歴史的役割も国際比較の視点でもってはいじめて的確な光を投げられることになると思われるからである。

【玉野井 芳郎】